

『紫式部集』注釈のために

——「注解」の方法への試考——

はじめに

廣田收・久保田孝夫の両氏と『紫式部集』の基礎資料の調査・集成の作業が本格化しはじめたのが二〇〇六年前ころ。倉卒の作業ではあったけれども、『紫式部集大成』（実践女子大学本／瑞光寺本／陽明文庫本）（笠間書院、二〇〇八年五月刊）というB5判ハードカバー装・全四六八頁の資料集に結実した（以下、『大成』と略称する）。主要伝本である表題の三本についての影印・翻刻・解題、基礎的研究の論考四編、古地図・写真・研究年表をおさめたものである。幸いにも学界には好意をもって迎えられ、すでに初版を完売したと出版社から報されている。

さらに一連の作業として「注釈」「研究一覽」「諸注集成」

横 井 孝

に取り組んだものの、三者ともに別々に多忙を極める職にあつて、会合して打ち合わせる時間もとれぬ状況になり、第二弾の作業は遅れに遅れてしまっている。その欠を補うとともに『大成』の作業中、あるいはそれ以後に意識されるようになった諸問題をまとめておく必要を感じ、陽明文庫本の精査を織り込んで、『紫式部集からの挑発——私家集研究の方法を模索して——』（笠間書院、二〇一四年五月刊）A5判ハードカバー装・全二三八頁に八本の論考、二編の鼎談と研究年表をおさめた。

さていよいよ次は「注釈」の番である。『大成』刊行直後から一部についてはすでに何度か原稿の試作を三人の間で進めており、三人とも意見が割れることは全くといっていいほどなかったものの、形態を異にする定家本・古本の

二系統の扱い方に困惑し、流布本の形態で注釈を考えるのか、原初形態により近いと考えられている形態で注釈をほどこすべきなのか、『紫式部集』という作品自体の理解の段階まで掘りさげるべきものなのか、さらに「注釈」という作業のポリシーにまで検討の余地が生じ、成稿しないままいついつ試行錯誤に手間取ってしまったのである。

今般、共同作業の三者とも、あらためて一環の研究・作業の継続を確認するとともに、仕切り直しの必要性を感じたため、稿者がとりあえず『紫式部集』における注釈のありようを検討してみることにした。そこで、本稿では、諸先覚の業績を参照するにあわせ、具体的には一、二の実例をとおして、共同研究の三人にとって理想となるべき本集の「注釈」のありようを（今さらながら、ではあるが）考えてみることにした。

一 注釈書の実態

『紫式部集』は、『源氏物語』の作者の家集であるためだろう、たかだか一二六首（実践女子大学本）を収めるだけの小さな作品であるにもかかわらず、また、研究の歴史は勅撰集ほど重厚ではないにせよ、すでにその注釈書は十指にあまる。他の私家集では、これほどの質量は類例がない

のではないか。

二〇一五年春現在で刊行、公表された（インターネットのサイトは除く）おもな「注釈」は以下のとおり。

- ① 竹内美千代『紫式部集評釈』（桜楓社、一九六九年六月刊）。〔略称「竹内『評釈』」〕
- 同・改訂版（桜楓社、一九七六年三月刊）。
- ② 南波浩『紫式部集 付大式三位集・藤原惟規集』（岩波文庫黄帯174・1）、岩波書店、一九七三年一〇月。〔略称「南波『文庫』」〕
- ③ 山本利達『紫式部日記 紫式部集』（新潮日本古典集成、新潮社、一九八〇年二月刊）。〔略称「山本『集成』」〕
- ④ 木船重昭『紫式部集の解釈と論考』（笠間叢書165、笠間書院、一九八一年一二月刊）。〔略称「木船『解釈』」〕
- ⑤ 木村正中・鈴木日出男・後藤祥子・小町谷照彦・秋山虔『紫式部集全歌評釈』（學燈社・國文學 解釈と教材の研究『第二七卷一四号、一九八二年一〇月〕。〔略称「木村ほか『全歌』」〕
- ⑥ 南波浩『紫式部集全評釈』（笠間注釈叢刊9、笠間書院、一九八三年六月刊）。〔略称「南波『全評釈』」〕
- ⑦ 伊藤博「土佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記」（新日本古典文学大系24、岩波書店、一九八九年一二月刊）。

刊)。「略称」伊藤『大系』

⑧ 中周子『賀茂保憲女集 赤染衛門集 清少納言集

紫式部集 藤三位集』(和歌文学大系10、明治書院、二〇〇〇年三月刊)。「略称」中『明治』

⑨ 中野幸一『紫式部日記 付紫式部集』、武蔵野書院、二〇〇二年三月)。「略称」中野『校注』

⑩ 田中新一『紫式部集新注』(新注和歌文学叢書2)、著、青簡舎、二〇〇八年四月)。「略称」田中『新注』

⑪ 笹川博司『紫式部集注釈』(『大坂大谷国文』第41号、二〇一一年三月)↓1~28「略称」笹川『注釈』

「同」(『大坂大谷国文』第42号、二〇一二年三月)↓29~55

「同」(『大坂大谷国文』第43号、二〇一三年三月)↓56~91

「同」(『大坂大谷国文』第44号、二〇一四年三月)↓92~126、陽明1~7

⑫ 廣田收『紫式部と和歌の世界 一冊で読む紫式部家集 訳注付』(武蔵野書院、二〇一一年五月)。「略称」廣

田『世界』

『紫式部集』(廣田担当)と『紫式部日記』(上原担当)のテキスト版。

⑬ 笹川博司『紫式部集全釈』(私家集全釈叢書39、風間

書房、二〇一四年一〇月刊)。「略称」笹川『全釈』

『木船『解釈』』④は「注釈」を標榜するものではないが、実践女子大学本の全歌についての解釈・考証を含むものであり、注釈書に準ずる著述として挙げておく。

いずれも力作・労作揃いであり、間然とするところはなにかに見える。しかし、

◎実践女子大学本発見以前で、底本を三条西家本と也足叟素然本(ともに書陵部蔵)とする注釈

〔竹内『評釈』〕

◎底本を定家本系の実践女子大学本とする注釈

〔南波『文庫』〕〔木船『解釈』〕〔木村ほか『全歌』〕

〔南波『全評釈』〕〔中『明治』〕〔中野『校注』〕〔田

中『新注』〕〔笹川『注釈』〕〔笹川『全釈』〕

◎底本を古本系の陽明文庫本とする注釈

〔山本『集成』〕〔伊藤『大系』〕〔中『明治』〕〔廣田

『世界』〕

と、配列を異にする伝本を底本とする注釈書が混在するのが現状であり、定家本・古本間には歌序のみならず詞書等も差異があることを考慮にいれるならば、これらを同一に論じてよいのか、という問題も生じるであろう。両本のうちの一方を底本にすることは、もう一方の本の注解を要す

る問題点を捨象することにならないかどうか。

また、『南波』『文庫』『山本』『集成』『伊藤』『大系』『中
『明治』『中野』『校注』などのテキスト版は、脚注を付す
るだけで、本文は段落・行間をもうけない延べ書き（版組）
になっているが、他の詳注を付す注釈書はすべて一首ごと
にそれぞれの項目による記述がなされている。一般のいわ
ゆる「注釈書」の形態に則った方法である。贈答歌も贈歌・
答歌に「泣きわかれ」させられるのが通常の「注釈」の体
裁になる。

唯一「木船『解釈』」は、注釈一般の形式を踏まず、研
究篇に示す自論の区分け（歌群）によって数首ずつをあげ、
「解釈」や語彙考証を、注釈にありがちな「語釈」等の項
目の枠にとらわれず、自由に展開する。初出『紫式部集』
解釈研究（一）（四）¹等以来「解釈」というスタンス
に由来する言述なのだろう。ただ、この数首の歌をひとま
とめに掲出する方法は、歌群をバラバラに分解しないで、
セットにすべきまとまりをセットのまま検討するのに適し
た形態とみることができ、家集という作品の形態にとって、
検討に値する方法ではなからうか。

『笹川『全釈』』は、本稿執筆時点での最新の注釈書では
あるが、風間書房刊『私家集全釈叢書』の一冊であり、お
およその体裁は叢書全体に統一の形態に準じているらし

い。本文は、おおむね一首ごとにあげられ、返歌がある場
合には同時に掲出している。その各首の注釈の体裁は、凡
例から摘記すれば次のようなものであった。

（本文）……

（1）【異同】は、南波浩『紫式部集の研究』^{校異編}（一九七二
年・笠間書院）の研究成果を踏まえて、底本と次の伝
本との間に本文の異同がある場合、それを（陽）など
の略号とともに示した。……

（2）【通釈】……

（3）【語釈】は、各単語の語義等を示し、特に『源氏物語』
に用例がある場合は、それを優先して掲出した。

（4）【他出】は、同じ和歌が他の歌集に収められている場
合、それを掲出した。

（5）【参考】は、これまで既に数多くの『紫式部集』につ
いての注釈が積み重ねられてきたことに鑑み、できる
だけ代表的解釈を紹介し、それに対する現時点での私
見を述べた。……
（七七〜七八頁）

『私家集全釈叢書』²は、第1巻『赤染衛門集全釈』以来、
最新の第39巻『笹川『全釈』』に至るまで、各巻の記述に
繁簡の差はあるものの、【異同】【通釈】【語釈】【参考】の
構成を規定の方針としている。『定頼集全釈』『殷富門院大
輔集全釈』のように【異同】の項のないもの、『小野篁集

全釈』『為頼集全釈』のように【参考】の代わりに【補説】または【考説】を立項するものなど、著者の裁量によって変更された類例はなくもない。

〔田中〕『新注』をおさめる青簡舎刊「新注和歌文学叢書」は、二〇〇八年に第1巻を発刊した後発の叢書であり、現在のところ一四巻を数えるが、私家集・勅撰集・歌合・定数歌など広範な「和歌文学」を対象とする。「全釈叢書」が時として大冊の巻が含まれるのに対して、本叢書は〔田中〕『新注』の約二八〇頁にしめされるような、やや軽快なボリュームを基準とするかに見える。したがって、注釈内容は他の注釈書と同様に、「校異」「現代語訳」「語釈」「補説」の各項目をおさめつつも、「語釈」については凡例において、「現代語訳の根拠になる項目を中心に、出来るだけ簡潔に書いた積もりである。式部の語意感覚についても時に触れた」(iv頁)という。

また、私家集の叢書には、別に貴重本刊行会の「私家集全釈叢刊」がある。発行元の解散によって廃刊になるまで、第1巻『小大君集全釈』から『大式高遠集全釈』にいたるまで全一七巻を重ねたが、『紫式部集』の注釈は刊行されなかった。これも各巻の著者の裁量があるらしいが、おむね【校異】または【校訂】、現代語訳、【語釈】【補説】の構成がとられている。ただ、各項目について凡例に基準

が明記される例は多くはなく、高橋正治『兼盛集全釈』(同叢刊・第4巻、一九九三年六月刊)に、

一 現代語訳、語釈、補説に分けて解説した。語釈の部分も、単なる語釈の域にとどまらず、語釈として含ませる最大限の説明をしたところも多く、その範囲を越えるものを補説とした。一つ一つの歌を読みながら、できるだけ兼盛という人物、兼盛の生きた時代を少しずつ体感してゆぐためである。注釈書の体裁を破っている部分も多いが、必要と思われることはすべて書き記すことにした。(五―六頁)

とあるのが目を引く。「全釈叢書」と比較して【校異】欄に注意をはらうのが本叢刊各巻の特色ともいえるが、その他は、久保木哲夫・花上和広『康資王母集全釈』(同叢刊・第8巻、一九九七年三月刊)には、【補説】欄について「他文献資料・人物考証・詠作年次、その他【語釈】では扱いにくいことを記した」と記す程度で、やや簡略な語注と見える。

以上、私家集の注釈は、著者が「注釈書」たることを意識しない場合、あるいは故意に既成の「注釈書」の形式を回避した場合を除けば、形式的(各項目の)には注釈に大きな差異はない、ということになる。

二 諸注集成の実例

既成の「注釈」の様式が万全な「方法」であるか否かという根本的な問題意識はさて置いて、外形的には現行のものにほぼ異同は見られないということであった。私家集のみならず、他の分野についてのさまざまな注釈の歴史がその現実に保証を与え、固定化に寄与していると評することができるだろう。

それでは「注釈」の内実はどうなっているのだろうか。具体的な例として、『紫式部集』の冒頭歌の詞書から一題拾ってみよう。

『紫式部集』の場合、定家本／古本のいずれの本文を底本にするか、まずそこから問題なのではあるが、ここでは実践女子大学本の本文を引いておこう。

はやよりわらはともたちなりし人

にとしころへてゆきあひたるか

ほのかにて十月十日のほと月に

きおひてかへりにければ

めくりあひて見しやそれともわかぬまに

くもかくれにし夜はの月かけ

古本＝陽明文庫本の本文とは微細な差異があるが、冒頭歌としては校異の範囲でしかない（後半のような配列の間

題がない）ので、ここでは言及しないことにしておく。

詞書劈頭の「はやよりわらはともたちなりし人」に対して、従来どのような注釈がなされてきたか、諸注を対比してみると次のようになる。ことの性質上、引用が長くなるが寛恕を請う。

▼竹内『評釈』

（釈）○わらはともだち 童友達。「わらは」は、「ちこ」

より大きいがまだ元服しない子供。男女ともという。

（評）昔の幼な友達であったが久しく逢わなかった人は、紫式部の家柄と近い受領の女であろうか。帰京して来てめぐり合ったのかも知れない。

▼清水『新書』

ずっと以前から幼友だちだった人に

▼南波『文庫』

（記述ナシ）

▼山本『集成』

ずっと幼い頃から友達だった人に、何年かたつて出会ったところが。この女ともだちは親が国司で、親と共に地方へ行き、親の任期が終って上京したので、お互いがある場所へ行き出会ったのであろう。

▼木村ほか『全歌』

「童友だち」が誰かは不明。

▼南波『全評釈』

はやうより―幼いときから・ずっと以前から。イ音便は平安朝初期からすでに広く行われていたが、形容詞のウ音便は、宇多帝の『周易抄』に「微クハシウス」とあるのが古い用例で、また『伊勢物語』にも「からうじて盗みいでて」(六段) などとあるように、平安中期になって現われ、初めは話しことば(口語)にのみ用いられていたようであるが、しだいに散文や歌の詞書などにも用いられるようになった。しかし、歌には用いられなかった。『紫式部集』では定家本系・古本系ともすべて「はやう」と音便形で表記されているが、この歌を収載している『新古今集』と別本系の宝暦本は「はやく」と表記している。別本系の宝暦本は『新古今集』の詞書をそのまま写しているもので、『新古今集』のような勅撰集では、献上本という性格から口語的性格をもつウ音便をさけたものと思われる。しかし、勅撰集の伝本の中には、たとえば『古今集』(二六三)「はやうすみけるところにて」(元永本・筋切・為相本・寂恵本)、同(二二八)「やよひに鶯の声ひさしうきこえざりけるをよめる」(清輔本・昭和切・筋切・卷子本・関戸本・貞応二年本など)のように、ウ音便の表記がかなり多く見られる。だが、これらは伝

写の過程でウ音便に移ったものと思われる。『紫式部集』は、女性の、私的な家集であり、詞書も最初から音便で表記されていたものとみられる。

わらは友だち―初冠・裳着などの男女成人式を行わない前からの幼友だち。

▼伊藤『大系』

以前から幼な友達だった人。

▼中『明治』

童友だち―幼な友達。

▼田中『新注』

○はやうより 以前より。幼い頃より。現時点より往事を振り返つての表現。「早くより」のウ音便形。

○わらはともだち 幼年期仲間。勢い、同世代の友であろう。

▼廣田『世界』

わらは友達 幼馴染。太皇太后宮昌子内親王に仕えた童女か(『新考』)。歌(6)「つくしへ行く人のむすめ」と同じならば、橘為義女(『基礎』)、平維将女(『講座』)か。

▼笹川『注釈』

○はやう 早う。以前。『源氏物語』に「はやう、まだ下臈に侍りし時、あはれと思ふ人侍りき」(帚木①四六) ○わらはともだち 元服や裳着前の幼い時から親しく交

わっている人。『山田法師集』に「わらはともだちにて
いみじうかたらひ侍りし人、もろともにとちぎり侍りし
を……」（二三）など。

▼笹川『全釈』

○はやうより 早くから。『源氏物語』に「はやうより
へだつることなう、あまたのみこたちの御なかに、この
きみをなん、かたみにとりわきておもひしに」（胡蝶・
七八九）など。

○わらはともだちなりし人 「童友達」は、元服や裳着
前の幼年友達。『山田法師集』に「わらはともだちにて
いみじうかたらひ侍りし人、もろともにとちぎり侍りし
を……」（二三）など。「ともだち」は単数にも用いる。『源
氏物語』に「たいふなどがわかくてのころ、ともだちに
てありける人」（東屋・一八二三）など。「なり」は断定

の助動詞。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。助動
詞「き」には、表現者が直接体験した過去を回想する場
合に用いられるという説があり、それに従えば、この「し」
は『紫式部集』が自撰家集であったことの痕跡。ただし、
「し」は「もう過ぎ去って取り戻せない」「過去のことを
回想する語で、現在ではなくなったことを示す働きが
あった」（山口明穂『日本語を考える』二〇〇〇年九月・
東京大学出版会）という説も。「童友達」が誰か特定し

ようとする試みは、角田・世界（一八頁）の陸奥守藤原
実方女説をはじめ、諸説があるが、未詳。

以上、長々と冒頭の一節に対する語釈を各注釈書から引
いてみた。これだけでも各注釈書の性格を、ある程度は判
別できるところがあるだろう。テキスト版という形式のた
めに制約のあるもの、脚注のように限られたスペースのも
の、などはいきおい簡略にならざるをえない。一方、専著
である注釈書は、比較的自由に書き込むことができるため
に、南波『全評釈』のように、「はやうより」の語形をめぐつ
て（語義ではなく）音便の歴史と歌集におけるあつかいを
「論」ずるもの、笹川『全釈』のように、『源氏物語』中の
用例を検索するもの等々がある。

南波『全評釈』には、このほかに「わらは友だち」の具
体的な人物比定についての先行研究に言及する【補説二】
約二頁分・三七行が付けられている。また、『紫式部集』
の用語の語義・語史を徹底する方針は一貫しており、この
直後の本文「ほのかにて」についても、考えうる六通りの
語義から意味を特定しようとしている。なるほど、A五判
七六〇頁余のボリュームになるわけである。この『全評釈』
のことであったか、あるいは『紫式部集の研究』校異編
伝本研究編（笠
間書院、一九七二年九月刊）の場合であったか、出版の際

に書肆から原稿の縮約を要請されたと仄聞している。^⑤——つまり、右に「專著である注釈書は、比較的自由に書き込むことができる」とは記したものの、公刊する注釈の場合（もとよりWEBなどの公表手段を除く）、当然のことながら全く自由ではありえない。商業出版とのかねあいはつねに付随する問題なのである。

したがって、これまでの諸注釈書ともに詳述の姿勢を見せる一方で、ある程度（または、相当な）縮約も心がけねばならぬという、撞着しかねない方針を抱えてきた。山本『集成』・伊藤『大系』・中『明治』は当該書をふくむ叢書全体が普及の名目で立てられているため、脚注ではいきおい語義を中心とせざるをえない。廣田『世界』もまたテキスト版という、最も簡便な形式にしなければならぬところに、語義、人物比定説の紹介を詰め込んでいる。笹川「注釈」「全釈」ともに「特に『源氏物語』の用例がある場合は、それを優先して掲出」（『全釈』凡例）する方針がとられているが、それがその項目においてどのような意味を持つのか、というところまでは論及されない。『全釈』はもとより『世界』もまた専門的な読者を想定して制作されており、それだからこそなのだろう、関連する専門書（あるいは『源氏物語』）の参照をうながしているのである。

こうして諸注を通覧してゆくと、南波『全評釈』がこと

さら記述を徹底しようとしたのは、詳述することが自己目的化しているためではなく、『紫式部集』という作品における「自立した注釈書」を作り上げようと試みたもの——つまり、右のような意味での「注釈」がその注釈書内部で完結していることを目指したもの、と推察することができよう。

「関連する専門書の参照をうながすことなく、それ自体で自立させようとする注釈書は、おそらく破格の質量となつて、商業出版ベースにはとてもせられるものではない。いわば、現前の『全評釈』は理想と現実のせめぎ合いの結果といふべきであろう。

三 「注釈」形態の模索

もたもたと要領悪く論じてきたが、「注釈原論」で低徊する時間的余裕は、もはや稿者には失われつつある。これ以上、共同研究のお二方の足を引っ張るわけにもゆかない。そこで、従来の注釈書に倣うという前提のもとに、『紫式部集』のその再構築を試みる上での検討課題をあげておきたい。

〔本文〕

『紫式部集』の場合、底本はほぼ二とおりに限定されていることは前記した。より古態をもとめて陽明文庫本を採用するか、書写年代の古さと流布本としての現状から実践女子大学本を採用するか。それによって編著者のポリシーが表明されることになる、との考え方である。

前者Ⅱ陽明本に依拠する場合には、「日記哥」の問題とその処理を考慮しなければならないであろうし、後者Ⅱ実践女子大本の場合には、本集における「再編」の問題と取り組まなければならない。さらに配列の差異をどのように処理するのか、という課題もある。

また、本文の揭示の方法として、贈答などをひとつの歌群とみなして一括するのは、竹内『評釈』以来、木船『解釈』・田中『新注』・笹川「注釈」・笹川『全釈』などが採用している。むしろ南波『全評釈』・廣田『世界』のような一首ずつ分段する形式は少数派といってよい。和歌というものの挨拶・コミュニケーションとしての機能を考慮すれば、多数派の様式に蓋然性があると見るべきであろう。

以上を勘案し、折衷案のようなではあるが、底本として実践女子大本・陽明本を並列におくという揭示様式を考えてみてはどうだろうか。すでに竹内『評釈』が試みているが、定家本を代表する実践女子大学本、伝流のたしかな古本の陽明文庫本が使用可能な現在、底本の選択は重要であろう。

しかも、両系併記は「校異」もしくは「異同」の項目の存否にも関わってくる。現存諸本は、おおむね定家本・古本の二系統の本文の対立と見るべきであり、その両者の諸本は代表的伝本の末流にあるものと見なして差し支えない。とすれば、陽明・実践それぞれの本文に問題がないかぎり、校異の項目は不要であろうと考える。

〔口訳〕〔現代語訳〕または〔通釈〕

解釈のひとつの帰結としても、また商業ベースで考えるとしても、必須の項目である。しかし、にもかかわらず、諸注において、ほとんど注目されることがなかったことも事実である。

口訳に終始こだわりを見せていたのが萩谷朴⁽⁶⁾である。初期の『平中全講』『土佐日記全注釈』をはじめとして、後期の大作『紫式部日記全注釈』『枕草子解環』にいたるまで、「口訳というものは、古典の本文解釈の最終的な決算報告として、絶対の正確さを要求される」（『紫式部日記全注釈』凡例）、「流暢な現代口語訳であると同時に、原文の語数や順序を加減も顛倒もせぬ逐語訳をというのが理想」（『枕草子解環』第一巻「凡例」という方針が貫かれている。

「とぞいふなる」「かくなむ」などの係助詞に対してまで「なんてネ言ってるらしい」「こんなふうだね」（『土佐日記

全注釈』、傍線―横井）とするなど、やや行き過ぎの感もあるが、簡潔を旨とするとわかりやすい口語とかを標榜しながらも、さほど留意されることがなかった項目に対する反省材料を提供しているともいえよう。和歌の「口訳・現代語訳」というものの意義について、さまざまな議論があることが予測されはするけれども。

〔語釈〕

「注釈」の枢要部分である。同時に、その「注釈」あるは一書全体の性格を決定づける項でもある。

——と同時に、ほとんど自由領域といってもよい部分でもある。中野『校注』や伊藤『大系』・廣田『世界』のようなスペースが限られる場合を除いて、専著としての「注釈書」の場合、記事の多寡・深淺は一に著者の姿勢、単行本としての方針にかかってくる。『紫式部集』冒頭の一節で諸注を一覧したとおりである。

「はやうより」のウ音便について言及したのは南波『全評釈』・田中『新注』・笹川『注釈』・笹川『全釈』であるが、それが「はやくより」のウ音便であることを指摘する（学校文法の初歩）のみで、立項する意味が見いだしにくい。その点、『全評釈』が国語史の教科書的記述が目につくものの、「勅撰集では、献上本という性格から口語的性格を

もつウ音便をさけた」こととの対比で、「女性の、私的な家集であり、詞書も最初から音便で表記されていた」ことを指摘している点、これはこれで重要な視点を提供しているのではないか、と思えるのである。

小松英雄によれば、音便形と非音便形の使い分けについて、「語形が縮約されるほど他人行儀の度合いが低くなり、それに反比例して親密感を増すのがふつう」であり、「フォーマルな語形とインフォーマルな語形の分裂」なのである。小松は『源氏物語』における「いみじく／いみじう」を実例として、

物語のなかにおける両者の分布をみると、大きな違いがある。イミジウは、あちこちに不規則に分布しており、目だつた集中が認められないのに対して、イミジクのはうは、ところどころにかたまつて分布していることである。結論を先取りするならば、物語のなかでは、緊迫した場面にイミジクが使われている。

という。『紫式部集』の「はやう」が、『新古今集』巻一六・雑歌上（一四九九）の詞書の「はやくより」よりも「インフォーマルな語形」であることはまちがいない。

笹川『全釈』が引く胡蝶の巻の例は、玉鬘のもとにあつまった恋文のなかから螢宮のそれを取りあげた源氏が、宮への親近感を語る場面であつた。たしかに諸本「はやうよ

り」の音便形ではあるが、会話中の例でもあるので、小松英雄のいう「親密感を増す」表現であり「インフォーマルな語形」であるものの、詞書のそれと同列に論じられるのか否か、まだ検討の余地があるのではないだろうか。笹川「注釈」の帯木の巻の例もまた同様である。

ともあれ、「語釈」は「注釈」の枢要部分であるにもかかわらず、基準やマニュアルはなきに等しい。

「木村ほか『全歌』」は雑誌掲載のスペースが限られた形態のせいか、

「ほのかにて」は、視覚的な不明瞭さ（『評釈』『新書』と、時間的な短さ（『文庫』）との両者をかね（『集成』）、作者と友だちの出会いと別れそのものが夢幻であったかのように効果」的である（『解釈』）。

という表記方法をとる。このままでは、「視覚的な不明瞭さ」ではなく、「時間的な短さ」でもなく、その「両者をかね」る山本『集成』の意見に同じしていると読めるが、分명한書き方ではない。限界に近いまでスペースを節約したからである。しかも、『解釈』は『七月十日のほど』の月光に照らされた不分明な、幼友だちの形姿である」といい、明らかに『評釈』『新書』と同じく「視覚的な不明瞭さ」を採るのだが、引くところは木船による鑑賞部分であり、研究史の本筋ではない。「全歌」のこの部分を担当した木村正

中の美文好みの趣味に過ぎない。

このように誤り引かれ、かつ記述を節約した形の場合、意見をミスリードしかねない。理想をいうならば、他者の意見は、読者の誤解をまねかないようにする責務が引用者にあることはいうまでもない。南波『全評釈』が示したのはその一方法だった。つまり、「語釈」にかぎったことではないが、そこで意識さるべきことは、

▼「注釈」がその注釈書内部で完結していること（理想）
▼商業出版とのかねあい（現実Ⅱ限界）

という相克であった。このジレンマを意識しながら、最善を模索するのが「注釈」の使命なのではないかと考える。

〔補説〕

〔語釈〕は、あくまで「語」の「注釈」である。語義はもとより、文脈・語脈、必要あれば語史など、これとでも多岐にわたるため、範囲が限定しにくく拡大しがちなのは右にみてきたとおりである。ただ、諸注かならず〔語釈〕にかかわらぬ項目を立てていること、本稿第一節で通覧したとおりである。〔語釈〕その他のスペースに極端に制約がある——廣田『世界』のごとき——場合でも、補注の形で別項をもうけている。それを諸注、〔評〕〔補説〕〔参考〕〔評説〕〔補注〕など称している。

そこでは「語注」を補完する場合もあり、また、全体のなかから当該箇所的位置づけをみたりする場合もあり、さまざまな言述が展開される。冒頭歌の例でいえば、

◎当該和歌の鑑賞・批評＝竹内『評釈』

◎冒頭歌としての位置づけ＝南波『全評釈』・田中『新注』・

廣田『世界』

◎用語・人物の考証＝南波『全評釈』・笹川『注釈』・笹川『全釈』

などが、当該の項で論じられている。このうち南波『全評釈』は「補説」「評説」の項を設定し、「補説」欄には「行きあひたるが」の国語史的分析、「わらは友だち」の人物比定、「評説」欄には冒頭歌としての位置づけを『集』の構想と結びつけ「会者定離」の理において説く。至れり尽くせり、というべきか。

〔参考〕

前項「補説」等の項の別名称であったり、それとは別に設けられたり、南波『全評釈』に見るとおりである。

笹川『全釈』は【他出】の項を設け、「他の歌集に収められている場合」の指摘・引用の欄としているがね他の「私家集全釈叢書」（風間書房）は、この項に当該歌が勅撰集・私撰集等に収められる場合の注記を掲げているものが多い

（『源兼澄集全釈』『本院侍従集全釈』『相模集』等々）。『為頼集全釈』では【考説】の項を立てて、つぎのようにいう。

【考説】は、以上の項目（横井注―異同・通釈・語釈）に収まりにくい事柄や、作品の読み、集全体に関わることなどを記した、すなわち、当該歌の他書への所収、詠作年代や人物の考証、為頼の伝記的事実に関わるもの、歌語等の詠作史、作品の修辞や鑑賞に類することなどである。……（一〇六頁）

考えつくかぎりの、ありとあらゆる、ごった煮のような――つまり、「語釈」に収まりきらぬ事項のほとんどを、放り込むことのできる項目、ということなのである。右の凡例に例示されたものなどをいちいち項目にわけることなど愚の骨頂ということでもあろう。「注釈」の自由領域でもある。

したがって、「語釈」のようにスペースを気づかうことが少ないため、ここにはさまざまな資料・文献が引用されるケースが多い。凡例には引用文献についての記述がつづくことになる。しかし、ここにおいても、右の理想と現実のせめぎ合いがあるはずである。

〔諸注〕

この項は、『紫式部集』に限らず、ほとんどの「注釈書」

に類例を見ない、いわゆる「諸注集成」の試みである。いま、この項を仮設（仮想）するのは、「注釈」の理想形である「その注釈書内部で完結していること」と「現実」とのぎりぎりの限界値をもとめる試み、なのである。

諸注集成の先蹤と呼びうるのは、管見によるかぎりでは上村悦子『蜻蛉日記解釈大成』全九巻（明治書院、一九八三年～一九九五年六月刊）くらいなものであろう。その第一巻によれば、上村は、魔法使がいるならば若返らせてもらい「二十代前後の若さに戻って、もりもりと古典を研究したい」、けれどもそれも実現不可能なことゆえ、「これまでの先輩・畏友の解釈に関する成果を結集し、文殊の知恵により本文を正しく読解する事につとめ、原本復元に努力したい」（三頁）というユーモラスな「はしがき」を載せている。

さらにその「凡例」では、

一、「語釈」は原則として、次に掲げる諸本の「語釈」「頭注」「脚注」に書かれた解釈をとりあげて、ほぼ出版年月日の順にあげていったが、時には通釈や現代訳にあるものを使った場合もある。補注や追記もなるべく入れた。ただし、既にあげた解釈とほぼ同じであったり、修辭技巧や入勅撰集の指摘、および歌・詞書、さらに引歌があげられている場合、記事が幾度も重複す

るので、同上としたり、「前掲の如く」としたり、あるいはまとめて簡素化をはかった。……（七頁）

と説く。この冒頭の「諸本」とは、通常の伝本・テキストを指すのではなく、『蜻蛉日記解環』から新潮日本古典集成にいたるまでの二種の諸「注釈書」をいうのである。

実際の「語釈」の一例を第一巻から任意にあげてみよう。○かうものえうにもあらであるも【講義】「物」は「何

等かの価値あるものを指して云ふ語」で「氣の利いたやうでもなくて過してゐるもの」の意にとられている。

「えう」は静嘉堂本以外の諸本は「えう」であるが静嘉堂本は「やう」となっているのは大東急本や彰考館本などの書人に従って本文化したのであろう。解環・講義は「えう」を「やう」の仮名の誤りとして前掲のように解釈したのである。【学燈文庫】【探究】【抄】【全講】でも「やう」を採用。喜多氏は【訂新蜻蛉日記】においても同様で一貫して「やう」をとっていられる。【講義】「あり」は「存在と存続をあらわす」とある。【学燈文庫】では「もののやう」の本文で「世間なみの訳。大西氏は【新注釈】の方では「やう（様）」の仮名の誤りとみて、「世間一般の妻のような暮らしではなくて」と考え直された。これに對して「えう（要）」と底本以下諸本（静嘉堂本を除く）の本文をそのまま

認めているのは大系以下の諸氏。【大系】夫からいらぬもののように軽んぜられているのも。【新釈】必要。何の役にも立たずに生きながらえているのも。【全注釈】なんの訳にも立たぬありさまで暮しているのも、の意。自嘲の口吻がある。……（以下略）（七頁）

このような調子で全九卷中八卷（第九卷は「補注の補遺」とする八編の論考と各種索引のみ）の五一六九頁が貫かれていたのである。圧倒的な分量に対して敬服せざるをえない。たいへんな労作、中編の作品とはいうものの、破格の膨大な集積である。

しかし、右の実例でも読み取れるように、上村自身による「語釈」の文体と諸注の直接の引用と概括的な説明とが混在しており、その分別が一見したところでは読み取りにくいのである。要領よくまとめられたように見えて、実は整然としていない印象が強い、ということでもある。「凡例」にあるような「既にあげた解釈とほぼ同じであった」場合に「同上としたり」、「前掲の如く」としたり」というのも、必ずしも守られているわけではなく、

……【全講】はつきりした心構え。【全注釈】思慮分別、良識、理性。【新注釈】思慮分別・根生。【全集】實際的・世俗的な思慮分別。【全評解】才氣・才覚。……【集成】事に処してゆくための知恵才覚。（七頁）

などのような例も枚挙にいとまない。それゆえの全八巻・総五一〇〇頁余となると、読み通すのもなかなかの苦行といえなくもない。むしろ、部分的利用、つまみ食いの読書、摘読用に作られた「注釈」なのではないか、とさえ思えてしまう。

【諸注】欄を設置しなければならないと考えるのも、「引用」の正確さ、ということである。「同上としたり」、「前掲の如く」としたり」という判断はどこまで客観性をたもつことができるか、そして「同上」あるいは「前掲の如く」とする判断もどこまで有意なのか、という問題意識からでもあるのだ。それと同時に、自己の「注釈」がどのような位置どりをしているのか、位相を見きわめるための方法でもある、といえよう。

さて、以上、『紫式部集』注釈の現状を俯瞰し、これから成書に向けて取り組むべき課題などを通覧してきた。もともとと長々しい論述で恐縮であるが、もう少しお付き合いたい。稿末には、実例として五六番歌（陽明文庫本九一番）の「注釈」を試みる。実演としてはやや貧しい内容と評されることは覚悟しているが、実際に手がけてみなければ実感できぬ問題というものもあるだろう。『紫式部集』の「注釈」は、まだ緒に就いたばかりである。

四 付『紫式部集』五六(九二) 番歌「注釈」試行

本文 ……定家本・古本を代表して実践女子大学本・陽明文庫本を底本とし、久保田孝夫・廣田收・横井孝編『紫式部集大成』に依拠して翻刻、並載した。

参考 ……当該歌の勅撰集等への所収状況、あるいは関連資料を掲載し、語釈等への参照資料たらしめた。

口訳 ……過不足なく、自然な現代語訳を試みたが、古典韻文を現代語散文に置き換える不自然さがあり、十分でない懼れがある。

諸注 ……「語釈」欄に関わる注釈・論考の重要と認められる部分を「引用」した。「語釈」欄では書名・著者名だけで引用を省略することがあるため、その際に参照していただきたい項目である。ここでは網羅的ではなく、当該歌に最も重要と思われるトピックに関連して、初出年順に「引用」した。

語釈 ……当該歌の解釈に資する事項については、ほぼ制約を考慮することなく記した。ただし「諸注」欄に掲載したものについては、略号をもって示し、参照を促した。

補説 ……「以上の項目に収まりにくい事柄や、作品の読み、集全体に関わることなどを記した、すなわち、当該歌の他書への所収、詠作年代や人物の考証、為頼の伝

記的事実に関わるもの、歌語等の詠作史、作品の修辞や鑑賞に類することなど」(『為頼集全釈』)を集中的に論述する。

*

*

本文

実践女子大学本

はしめてうちわたりをみるにも

もの、あはれなれは

56 身のうさはこ、ろのうちにしたひきて

いまこ、のへそおもひみたる、

陽明文庫本

はしめてうちわたりをみるに物、哀なれは

91 身のうさは心のうちにしたひきていまこのへそ思ひ

みたる、

参考

〔紫式部日記〕

(賀茂臨時祭) 御物忌なれば、御社みやしろより、丑の時にぞ婦りまゐりたれば、御神樂などもさまばかりなり。(尾張) 兼時とよときが、去年こぞまではいつきづきしげなりしを、こよなくおとろへたるふるまひぞ、見しるまじき人のうへなれ

ど、あはれに、思ひよそへらるること多くはべる。

しはすの廿九日にまゐる。「はじめてまゐりしも、今宵の事ぞかし。いみじく夢路にまどはれしかな」と思ひいづれば、こよなくたちなれにけるも、「うとましの身のほどや」と覚ゆ。

〔紫式部日記全注釈〕下巻、一〇七頁／一二〇～一二二頁

口 訳

初めて内裏を見るにつけてもしみじみとした感懐があったので、

56 (わが) 身のつらさというものは、心の奥に思いを寄せて来て、このえにいる今も思ひはこのえに乱れ乱れていること。

諸 注

1 紫式部の初出仕はいつか？

紫式部の初出仕の年次については『紫式部日記』の「しはすの廿九日にまゐる」の記述をめぐって議論になっていたが、家集においても、91番歌の詞書「はじめてうちわたりをみる」の注釈に直結し、当然態度を確定しておかねばならない。

諸家の見解は、おおむね、

(a) 寛弘元年説＝中野65『新編全集』

(b) 寛弘二年説＝岡『基礎』、今井『人物叢書』、角田『紫式部の身辺』、中野『全集』、稻賀『作者』、田中『新注』

(c) 寛弘三年説＝壺井養知『紫式部日記傍注』、与謝野晶子『紫式部新考』、萩谷『全注釈』、南波『全評釈』、加納重文『源氏物語の研究』

(d) 寛弘二、三年説＝安藤為章『紫家七論』、竹内『評釈』、山本『集成』

(e) 寛弘四年説＝足立稲直『紫式部日記解』、島津久基『紫式部』、山中裕『平安時代の女流作家』に分けることができる。主に萩谷の(c)寛弘三年説の有効性が確認された後も(b)寛弘二年説が定説扱いされ、三年の可能性をも考慮しつつ、根拠を示さず「二年説に従っておく」とする論者も少なくない。次にその主な説の論旨にかかわる部分を公表順に掲げておく。

▼与謝野晶子「紫式部新考」(『太陽』一九二八年一・二月)

紫式部は、寛弘二年ごろから一条天皇の中宮彰子(後の上東門院)の御許へ女房として仕えることを望まれていたが……ついに承諾するに至ったものの、できるだけ出仕を

延期して、寛弘三年十二月二十九日に押し迫って、土御門殿の中宮の御許へ伺候したのであった。彼女が「身を思はずなると歎く事の、やうやう斜にひたぶるの様なるを思ひける」と詞書して、「数ならぬ……」ほか一首の歌を詠んだのは、その頃の感懷であろう。「身を思はずなる云々」は、本意な運命の圧迫を歎き、「身に従ふは心なりけり」とは、境遇の力に心の事由が忍従せねばならぬことを悲しんだのである。

▼島津久基『紫式部 人とその作品』（青梧堂、一九四三年二月刊）

……日記寛弘六年の部分に錯入したとせられてゐる所謂消息文の一節に、

いと忍びて、人の侍はぬもののひま／＼に、おとどしの夏頃より、楽府といふ書二巻をぞ、しどけなく、かう教へたて聞えさせ侍るも隠しけり。

と記してあるその「おとどし」といふのが何年を指すか……同じ手紙文と目されてゐる僚輩批評の条下に、赤染衛門のことを「丹波守の北方」と記してあるのから推して、その赤染の夫大江匡衡が丹波守になつたのは、御堂関白記によれば、寛弘七年三月三十日であるから、この手紙文は少くとも寛弘七年の春以後に書かれたものでなければならず、然らば恐らく右の文の「おとどし」といふのも寛弘五

年のことであらうし、その前年十二月二十九日に宮仕したとして、年次が恰当するのである。

▼岡一男『源氏物語の基礎的研究』（一九五一年一月刊）

……紫式部の初めて宮仕へしたのは、尾張兼時にたいする『日記』の記載と伊勢大輔に關しての彼女の態度から考へて、寛弘二年十二月二十九日の夜であつたと断定してよいと思ふ。（流布本『伊勢大輔集』に大輔が「いにしへの奈良の都の」の歌を詠んでゐるのを、大輔の今参りの時としてゐるのに拠つて立論した……）

▼中野幸一65「紫式部日記における二三の疑問―史実と暦日を中心として―」（早稲田大学『学術研究』第一四号、一九六五年二月）

（『日記』寛弘六年正月記事について）この一段は、正月一日坎日という暦の上からみると寛弘三年以外には考えられず……元旦坎日を宮仕え期間中に体験したという条件をみたすものは……岡博士の寛弘二年説だけであるが、この宮仕えの日時が十二月二十九日であり……寛弘三年の元旦坎日（注）が翌日のこととなつていささかあわただしい。そこで、さらにもう一年繰り上げて、寛弘元年の十二月二十九日に仕出したと考える方が適當のように思われる。

▼今井源衛『紫式部』（吉川弘文館、一九六六年三月）

（注・道長の集書）これらの管理は主として儒者に当た

せたらうが、中には物語とおぼしき「仮名本」もあり、その手に合わぬものもあった。それには、ほかにその方面にも明るい女房が必要であり、それにもし彼女が物語を作ることもできれば、彰子や妍子のためにもどれほど役立つかもしれない。察するに寛弘二年（一〇〇五）初冬に諸方から贈られた四十賀の料の品々のうち、ことに書籍類が興深く道長には感じられたのであろう。そのためこれを機に彼は大規模な集書を思い立ち、年が明けると早速それを実行に移した。紫式部を出仕させたのはその準備の意も若干はあったのではなからうか。

▼中野『小学館・全集』（一九七一年六月刊）

夫に死別してから中宮彰子のもとへ宮仕えするまでの数年間は、普通『源氏物語』の執筆時期と考えられているけれども、夫の死後の心の慰めに物語を書き始めたというのも、寡婦のつれづれに書き続けたとするのも、どうも実状に合わないような気がする。夫に死別してから一周忌を迎えるまでは、少なくとも物語の執筆などというささびごとに気を向ける心の余裕はなさそうだし……しばらくの間は、愛娘の養育のみを心の慰めに、日々を送っていたと見るのが真に近いであらう。父の為時は、長保三年越前守の任果てて帰京し、このころは散位であったが、文人として貴顕の邸宅に出入りしていた。やがて時の権勢家道長の土

御門邸にも招かれるようになって、娘の出仕を勧誘されるようになったらしい。……こうして初めて中宮彰子の許へ出仕したのが、寛弘二年十二月二十九日であった。

▼加納重文「紫式部の初宮仕年時」『古代文化』第二四卷七・八号、一九七二年七・八月

……異本紫式部集の初宮仕の際の詠歌以後の連接した四首が、十二月廿九日から正月十日までの、時期的にも近接した四首であることがわかる。……その手懸りになるのは、先述してきたように、「正月十日の程に立春になる」ということであらう。そこで、寛弘元年から五年までの立春の月日を調べてみると……寛弘四年正月十日が残る。しかも、この月日は、先の詞書における「正月十日の程」にピッタリ一致する。……すなわち、四年正月十日を十日あまりさかのぼる寛弘三年十二月廿九日が、紫式部がはじめて彰子中宮のもとに出仕した日である、ということである。

▼萩谷朴「紫式部の初宮仕は寛弘三年十二月二十九日なるべし」『中古文学』第二号、一九六八年三月↓『紫式部日記全注釈・下巻』角川書店、一九七三年三月刊）

……従来の寛弘二年十二月二十九日説には……立春の吉日であるという唯一つのプラスの条件が考えられる以外は、
1 寛弘二年十二月二十九日における中宮の御在所は東三条院内裏であったから、寛弘五年十二月二十九日一条院帰参

の際に、かほど切実な感懷は生じ難い。／2寛弘二年十二月二十九日直前の社会的条件には……物情騒然たるものがあり、中宮の女房を新規に抱えるにはふさわしい状態ではなかった。／3寛弘二年十二月二十九日当日は、この月が小の月であるので、大晦日の追儼の日にあたっていて、追儼から元旦の四方拝まで、内裏においても大臣家においても、徹夜で事を行なう年末歳旦の多忙の際に、紫式部が中宮に初出仕をしたとは思われない。……／4……（注・「しはすの廿九日にまゐる」云々の記事のある）寛弘五年まで、二年十か月も新参意識を持続していたと考えることは許されない。／5寛弘二年十二月二十九日に出仕したにしては、寛弘四年四月の興福寺の八重桜献上まで、一年四か月もの長い間、紫式部の中宮における行動は一切不明……といったマイナスの条件が挙げられるのに対して、寛弘三年十二月二十九日説を採ると、その日が二十八宿の点では危宿の凶日であるという唯一のマイナス条件を除けば、1寛弘五年十二月二十九日帰参の場所が、同じ一条院内裏であることから、満二か年前の初出仕当時を感懷深く思い起こすのは当然である。／2寛弘三年十二月二十九日直前の社会的条件としては……安定した状態で、特に中宮周辺及び道長一家には慶事が重なって、新規召抱えにもまことに縁起のよい時機であった。／3寛弘三年十二月二十九日

当日は、この月が大の月であるので、歳末・年始め恩忙という悪条件も無い上に……（注・住吉の神人との紛争により）一年間参内を停止して右大弁としての事務を執ることを禁じられていた藤原説孝が放還せられ……説孝が紫式部の亡夫宣孝の兄であり、勧修寺藤家の第四代の氏の長者であるだけに無関係であるとは思われないのである。……／4寛弘四年正月十三日に、弟惟規が六位藏人に補せられた（『道長公記』）のも、紫式部の出仕に対する反対給付であると思われる……

▼中野『小学館・新編全集』（一九九四年九月刊）

しかしながら、日記に見える次の記事は、式部が寛弘二年春にはすでに宮仕えしていたことを物語るものではなからうか。それはいわゆる女房批評の中に見える五節の弁についての記事である。／五節の弁といふ人はべり……／……式部がこの五節の弁と出会ったのは宮仕えの場であったと思われるので、日記に見える「見はじめはべりし春」は惟仲の亡くなる前、まだ五節の弁の黒髪が豊富であった寛弘二年の春のことと考えられる。したがって式部が彰子中宮の許へ初めて出仕した十二月二十九日は、寛弘元年であったと推定されるのである。

▼田中『新注』

……57・58贈答歌（注・実践女子大学本による）「とちたり

し」「み山べの」は既述の通り立春後の歌であり、立春当日にあたるこの59番歌（注・「みよしのは」と同年詠とは思われず、57・58歌は前年寛弘三年の初春歌と読むべきだからであり、従って、式部の初出仕はその前年末即ち寛弘二年十二月二十九日（この日も立春であった）とするのが至当である。

▼倉本一宏『紫式部と平安の都』（吉川弘文館、二〇一四年一〇月刊）

紫式部がどの年に一条天皇中宮の彰子の許に出仕したのかは、明らかではない。『紫式部日記』の寛弘五年（一〇〇八）十二月二十九日の箇所は、実家から宮中に参上したという記述であるが、……続けて、「今ではもうすっかり宮仕えに慣れきってしまっている」とあるから、前年というより、それ以前と考えた方がよさそうである。また、直前の十一月二十八日の賀茂臨時祭かもりんじさいの記述では、「尾張兼時おわりのかねときが、去年までは舞人としていかにもふさわしい様子であったのに、今年はすっかり衰えてしまった」と同情している。前年までの臨時祭での兼時の舞を、宮中で少なくとも複数回は見ているのである。

そうなると、寛弘三年（一〇〇六）か寛弘二年（一〇〇五）の十二月二十九日ということになるが、寛弘二年には十一月十五日に内裏が焼亡し、一条と彰子は東三条第内裏に遷

御している。その慌ただしい最中に紫式部がはじめて出仕したようにも見えないから、寛弘三年説の方に分がありそうである（寛弘三年三月四日に一条院内裏に遷御している）。宣孝が卒去してから五年半余り後のことである。

与謝野晶子は、この時期に『紫式部集』を伝記資料に用いた先見性は評価すべきだが、根拠を示さず断定的に記される点は時代性でもあろうか。

このなかでも中野幸一が興味をひく動きを見せている。「『日記における二三の疑問』稿において元年説を提示しながら、『全集』では二年説を採り、その後『新編全集』では「疑問」稿を敷衍して元年説に戻っているのである。しかもその間、「紫式部と『うし』稿では、「……とされている」と定説紹介の体裁ながらも「寛弘二年か三年」という。一見、定見がないかに見えるが、中野にとつての日記の最初の注釈である『全集』ではテキストの公共性を考慮していったん通説を採用したか。

2 「身のうさ」「したひきて」をめぐる

当該歌をめぐる争点は三つある。

(a) 「身のうさ」をどう理解するか。

(b)「したひきて」の語義。

(c)「このへぞ思ひみだるる」の語法。

(a)は一首の理解としては重すぎる問題であり、容易に解釈できるものではないが、諸家の見解は自ずと収斂するところがある。紫式部という人物に対する共通理解があるのではないか。(b)(c)は語義・語法についてであり、すでに決着がついていると思われる部分がある。

▼清水『新書』

帝・后のおわす晴れ晴れしい宮廷に出で立つて、なお「心のうち」に従^{したが}ってきて離れない「身の憂さ」を知る。そして、「いま九重の宮中にいると思えばさらに九重に（幾重にも）思い乱れる」。

▼河内山清彦『身の憂さは心のうちにしたひ来て』の解釈をめぐって―源氏物語の『したふ』の語意など―（『解釈』一九七五年九月）

源氏物語においても紫式部が、「したふ」を後を追いかける、後について行くの意味で用いているのであれば、彼女の初宮仕え当時の詠歌における「身の憂さは心のうちにしたひ来て」は、「身の憂さ」が宮仕えをはじめた自分の後を追って「心のうちに」しのびよってきた、と解すべき

であろう。「心のうちにしたひ来て」を宮廷生活へのひそかな憧れと受けとるのを拒むのは、「したふ」が去るもの、去ったものを追いかけるのに用いられ、この場合の宮廷生活のようなまだ経験していないこと、未知なるもの、あるいは将来に属する対象を求めたり、それに期待を寄せたりする用法がないことである。……

なお、最後に一言つけ加えるならば、紫式部集の当該歌について、紫式部は本来宮仕えを嫌厭していたにもかかわらず、わが家に対して生殺与奪の権をにぎる道長の強請に屈して出仕するほかに、したがってその宮仕え生活は心意に添わぬ苦痛でしかなかった、という彼女の心的状況を本歌はよくあらわしているなどと、あたかも「身の憂さ」の認識が宮廷生活からはじまるかのように解説するのは、当を得ていないと言っておきたい。紫式部にとって「身の憂さ」の観念は、浄土教思想に根ざすところの自己認識であり、近親とりわけ夫宣孝の死に遭遇して決定的に深まった存念であった。

▼木船『解釈』

《心のうちにしたひ来て》

この部分の主語を、《身のうさは》と見ない異説がある。そして、「慕ひ来て」は、これまで宮中を心の内で慕っていたのに、と解し、「身の憂さ」は「思ひ乱るる」にか

かる。》(『評釈』)とする。それは、〈長年憧れ続けてきた宮廷に初めて召し出された今、かえって千々に思ひ乱れて、不幸を背負ったわが身の姿に感慨が動く〉(『叢書』)の継承であろうか。……

「したひ来」とは、離れずについて来るの意で、(後から後から追っかけて来て)『文庫』というのでもない。初句《身のうさは》を主語とする述語を終句《思ひみだるる》と見るのは、異常に離れ過ぎていて、採れないのと両相まって、《身のうさは》が主語で・《したひ来て》がその述語と解すべきである。右掲出の薄雲の巻の明石君歌の「身のうき舟やしたひ来にけむ」も、同様の文脈である。また、「したふ」という語そのものにも、〈この場合の宮廷生活のようなまだ経験していないこと、未知なるもの、あるいは将来に属する対象を求めたり、それに期待を寄せたりする方法がない〉のである。

《心のうち》というのは、詞書の〈内裏^{うち}わたりをみるにも〉とおそらく無関係ではあるまい。《内裏^{うち}》に参上したが、それで《身のうさは》を忘れて新たな活氣を得たのではなかった。皮肉にも、《身のうさは》、《内裏》ならぬ《心のうち》に離れずついて来た、と言うのである。

《いま九重に思ひみだるる》

底本以下、「いま九重ぞ思ひみだるる」とする伝本が多い。

……「九重」だけで「幾重にも」を意味する例はなく、「幾重にも」の意を強めて「九重ぞ」と言った例もない。それが連用修飾語に働く場合は、かならず「に」を伴った「九重に」の形である。あるいは、「いま九重ぞ」で文が切れ、その「ぞ」を強い断定に解することは、終句との関係が唐突になり、不可である。で、「いま九重ぞ思ひみだるる」とある本文に従うかぎり、その「九重ぞ」は主語以外には解しようがなくなり、意をなさない。《九重に》の本文をよしとし、「宮中において」と「幾重にも」の意を掛ける、と解したい。

わが心中を《心のうち》と言い、しかも、《思ひみだるる》こと《九重に》と言う。その掛詞の連続使用は、単なる修辭にとどまらず、出仕に及んだみずからを悔い自嘲する皮肉なのである。

▼中野幸一78「紫式部と「うし」」(『國文學』二三卷九号、一九七八年七月)

式部の初宮仕えは、寛弘二年か三年の一二月二九日とされている。夫を亡くして悲愁にうち沈んでいた式部が宮仕えにできるようになるまでには、再三にならず父為時の勧めや道長の要請などがあつたものと思われるが、式部自身の心の中にも、いかほどか宮仕えに対する憧憬の念があつたであろう。……その憧れの宮廷にともかくも出仕した今、

少しは身の憂さの嘆きもはれるかと思いきや、その憂さはなお執拗に心を離れないで、この晴れがましい九重の宮中で、さらに深く思い乱れている。そのみじめな自分の姿に、改めて執ねきわが身の憂さを思い知らされて懊悩しているのである外界の華麗さが内面の憂愁をきわだたせ、深化させているといえよう。……ここにおいて式部の憂愁の度合は、宣孝との死別を主因とする従来 of 厭世観に加えて、さらに宮仕えがもたらした違和感・疎外感・劣等感・孤独感等々が相乗しあつて、いつそう深化されている様相を見るのである。

▼木村ほか「全歌」（担当Ⅱ後藤祥子）

底本第四句は「いまこのへぞ」とあるが、「九重」は「思ひ乱る」の主語であり得ないとすれば、連用修飾語としての用法から「九重に」とする流布本文に従う『解釈』が穏当か。また「したひ来」を出仕以前からの宮中へ憧憬とする（『叢書』『評釈』）のも不適当（河内山清彦『紫式部・紫式部日記の研究』『解釈』）。

詞書は一見、内裏の光景がそれを見る不特定の誰彼にと同様に作者にそこはかとなない哀感を催させたかにもとれるが、歌われているのは作者固有の屈託に他ならず、つまり「内裏わたりを見る」はこの場合、「出仕」の言い換えなのすぎまい。内裏は憂悶を掘り起こす新たな契機となり、

改めて「憂さ」を断ち切れぬ自分を認識する。

▼南波『全評釈』

『源氏物語』では、「心憂」（一九）・「心憂し」（二五九）・「憂さ」（三）・「心憂かり」（二三）など、物事が思いどおりにならないで、つらく、悲しい心理状態をあらわす、主観的な心状表現語は、多数見られるが、「心の憂さ」はない。これは『後撰集』あるいは伊勢の時代から以後、「身」（身の上・境遇）を嘆く想いがしきりに表明されはじめたが、「心」を客観視して「心の憂さ」と表明するまでには至らなかったようである。

ところが、式部はこの歌において、「身の憂さは、心の中にしたひきて」と表明することによって、「身」と「心」とを対置させて見るに至っている。「身」は身の上・境遇という外的条件の反映であり、「心」は自己内部に所有する自己主体であつて、その二つを分けて見ている姿勢である。それは、外界と自己の内界との間に一つの壁を意識する心的傾向であり、外界にとけ込もうとせず、外界の外に立つて、外界を客観視しようとする姿勢でもあつた。それは、「身」は外的条件によって運命づけられた、宿世的なものであるが、「心」は自分のもので、主体的に左右する余地のあるものという姿勢でもあつた。にもかかわらず、その「身の憂さ」が、自分の所有である「心」の中にまで

「したひきて」、それを領導しようとしていることを思うと、「九重に思ひ乱れ」ないではいられなかったのである。

ここにいわれる「身のうさ」の内容は、どのようなものであつたろうか。それは、

(1) 時を得顔に、花やかな生活をくり広げている宮廷の人々を見るにつけて、受領の寡婦といった身の宿世のつたなさを痛感し、何か場ちがいの世界にいるような違和感。／(2) 政権を確保し、榮達をはかるためには、骨肉相争つて狂奔する上流、それに無氣力に依存し、没主体の生活を送っている中・下流貴族たちとの違和感。／(3) 口うるさい先輩同僚女房たちとの人間関係のわずらわしさ。／(4) 在野時代は親しく交わった友人たちが、式部の官仕えを不快に感じての離反。／(5) 事あるごとに、人前に顔を出し、立ちなれた振舞を強いられた女房生活。

などが、式部の人柄・性格には耐えられなかったのであると思われる。

▼大石直子 89 「心のうちにしたひきて」 攷——紫式部集歌注解(一) (『研究と資料』第二輯、一九八九年七月)

……(河内山)氏が論文であげられた、

⑫は、北の方おなしけふりにのほりなんとなきこかれ給て御をくりの女房のくるまにしたひのり給て(桐壺)

……など、(河内山)氏は、「桐壺更衣の母が更衣の亡骸を茶毘にふす葬送の女房の車の後を追いかけたのである。」と名言されるが、これに先立つ部分に動き出す車の描写が為されているわけではないのである。そしてまた、

⑬うらめしけにおほしたれとさすかにえしたひきこえ給はぬをいとあはれとみたてまつり給(賢木)

などは、東宮が母・藤壺が退出することを恨めしいとしているのなら、「シタフ」は母恋しさのあまり「行っちゃいやだ」と駄々をこね、ひきとめるようすとりたいところである。行動として、「後を追いかける」よりも妥当といえるのではなからうか。

やはり、「シタフ」は、思いを寄せることが原義でそれに伴う動作をも意味するもの、それが、源氏物語の書かれた時代も含めて変わらずに続いたもの、であるように思われる。

かくてそれは、歌の構造を「身のうさは」が二句目以下をまとめる提題の句と捉える、旧解釈の方が適切といえるのであろう。すなわち、「身のうさ」＝「こ、ろのうちにしたひきていまこ、のへそおもひみたる、」である。二句目以降に、これまで心の中だけでの営み、つまり、宮廷や宮仕え生活を想像し思いを寄せていたことと、にもかかわらず出仕して思い乱れている現状を述べ、それを身の憂さ、

我が「身」のいやなこと、としているととるのである。それが和歌として一番率直な解釈方法なのではなからうか。

紫式部が、自らが思いもよらなかった宮仕えに対する挫折の念を詠んだ歌、この歌はそう捉えたい一首なのである。

▼大石直子・野村精一 90 「いまこゝのへぞ」 攷——紫式部集歌注解（二）（『研究と資料』第二二輯、一九九〇年七月）

……要は平安朝にあつては、「こゝのへ」は歌語であつた、というにつきるのであるが、なお枕および源氏にのみ、その例外が存することの意味は何か。……

おそらくそれは、漢文学・漢詩文の影響かと思われる。そのよみが「クヂウ」か「キユウチュウ」かはよくわからないが「九重」という語は、この時代の漢詩文に相当例が見出される。……（用例省略）……

これらよりするに、漢詩文にくわしい清少納言や紫式部であれば、他の歌よみたちのように、取り立て、歌ことばであることに制扼を感じなかつたのではあるまいか。というより、「こゝのかさね」という別のことばもまだ使われていて、「九重」の訓みが定着していなかつた時代に、むしろ「こゝのへ」を歌語として定着させた上で、これを散文の修辭として意図的に使つたのかもしれない。

▼田中『新注』

前歌の「身にしたがふは心なりけり」と嘆く思いが、出仕早々に作者の心を襲う。境遇・身分がら、初めて見る宮中への憧れもあつたろう。しかし、その心の中には、また従来からの身分意識や非社交性から来る憂さ・嘆き・苦痛が付いて来て離れず、その落差をいやが上にも味わわされたのである。宮廷内を立ち馴らす人々の挙措・振舞・服装・持ち物を始め、行事・しきたり・規則・慣習から調度・小道具・装飾類に至るまで、目の前に拡がる別世界は、今まで心のどこかで慕ひ続けてきた憧れの宮廷なのに、生來の「身の憂さ」が、ここまで、消えることなく一緒に付いてきてしまつて、安らかな心などどこへやら、ただ躊躇し、驚き、思案し、圧倒され、葛藤し、立ち疎む。これこそわが「身」に従う「心」の実態なのだ。

出仕した途端、早々と「身の憂さ」の思いが立ち上がつて來たのである。それも九重の宮廷らしく幾重にも幾重にも惑乱するばかりの自分を突き上げる。

(a)「身のうさ」には直接の解答がなく、注釈に向きにくい課題であろう。補説欄参照。

(b)をめぐつて河内山清彦の指摘するところは語釈欄参照。「心のうちにしたひきて」を憧れ・思慕と解するのは現代語に引かれたものであろう。

(c)「このへぞ…」については、諸本文の現状を追認するほかあるまい。「このへにぞ」は字余りで成り立たない。これも語釈欄参照。

語 釈

○はじめてうちわたりをみるにも

初めて内裏を見るにつけても。紫式部の初出仕の年時に関わる表現である。『紫式部日記』に「しはすの廿九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵のことぞかし」とあるのをめぐって、諸注欄に示したように寛弘元年（一〇〇四）から四年（一〇〇七）にかけて諸説あったが、いま萩谷朴・加納重文・倉本一宏らに従って、寛弘三年二月二十九日初出仕と見ておく。

一条天皇時代は内裏火災が相次ぎ、里内裏を転々としていた。その歴史をふまえて「紫式部は大内裏の内裏を知らずに源氏物語を書いてゐた」と指摘して、何となく正規内裏をもとに『源氏物語』が創作されていたと思われていた学界に新風を巻き込んだのが阿部秋生「女房紫式部の生活してゐた内裏」（『東大教養学部人文科学科紀要』一九五六年七月。のち改稿して『源氏物語研究序説』所収）であった。一条院は『拾芥抄』に「一条南、大宮東二町。謙徳公（伊尹）家、又為法住寺大臣為光公家」とあるのによれば、

南北は一条大路から土御門大路まで、東西は大宮大路から猪熊小路までを占めた。火災の多くは放火によると見られる（岡本堅次「藤原政権と火災について」『山形大学紀要』人文科学五巻三号・一九六四年二月）。

寛弘三年当時は三月四日より同五年六月新造内裏が落成するまで一条院を里内裏とした。ちなみに寛弘二年は一月一日に内裏焼亡があつて東三条院を里内裏としていた。橋本義彦「里内裏沿革考」（『平安貴族』平凡社、一九八六年八月刊、所収）によって寛弘年間の内裏移転（天皇の動座）状況を表示すると次のようになる。

内 裏	長保五年（一〇〇三）	10月8日↑……↓寛弘二年（一〇〇五）	11月15日焼亡
（職曹司）	寛弘二年（一〇〇五）	11月15日↑……↓寛弘二年（一〇〇五）	11月27日
東三条院	寛弘二年（一〇〇五）	11月27日↑……↓寛弘三年（一〇〇六）	3月4日
一条院	寛弘三年（一〇〇六）	3月4日↑……↓寛弘五年（一〇〇八）	6月以前
内 裏	寛弘五年（一〇〇八）	6月以前↑……↓寛弘六年（一〇〇九）	4月以前
一条院	寛弘六年（一〇〇九）	4月以前↑……↓寛弘六年（一〇〇九）	10月5日焼亡

〔織部司〕 寛弘六年（一〇〇九） 10月5日↑……↓寛弘

六年（一〇〇九） 10月19日

枇杷殿 寛弘六年（一〇〇九） 10月19日↑……↓寛弘

七年（一〇一〇）

一条院 寛弘七年（一〇一〇） 11月28日新造落成

なお、「うちわたり」の「わたり」は内裏の婉曲表現。『紫

式部集』中、98・110・126のいずれも詞書に使われる。大石・

野村90は、和歌の「いまこゝのへそ」との対応を指摘する。

○ものあはれなれば

しみじみとした感懐があったので。陽明文庫本「物、哀

なれば」と表記するが、「ものあはれなれば」と訓読する。

実践女子大学本も同じく、「ものあはれ」ではなく「もの

のあはれ」とあるのに注目したい。100「あらためてけふし

もののかなしきは身のうさや又さまかはりぬる」と同じ

用法であって、直接事象にふれての感懐を表す。南波『全

評釈』に「源氏」の野分などから「ものあはれ」四例あ

げて「何かにつけて、しみじみとした感懐が湧いてきて」と

するが、用例いずれも「もの」が発する事象を指し示し

ており、「何かにつけて」という焦点のない、ぼんやりし

た表現ではない。

○身のうさは

（わが）身のつらさは。「したひきて」に懸かる。「憂さ」

は現代語でも「憂さ」とすべきか。その内容を説明しよう

として、中野78は、宣孝との死別による「厭世観」、「違和

感・疎外感・劣等感・孤独感」をあげ、南波『全評釈』は、

場ちがいの違和感、身分の違和感、人間関係、友の離反、

女房生活など詳細に指摘する。当たらずといえども遠から

ずではあろうが、歌文の語るところは抽象的であり、具体

化を図ろうとすれば却って真意をそこないかねないので、

一首の解釈としては深入りしない方が賢明かも知れない。

補説参照。

○心のうちにしたひきて

心の奥に思いを寄せてきたここに来て。「したひきて」

を竹内『評釈』が「（宮中を）心の中で慕って来て居りな

がら」、南波『文庫』が「後から後から追いかけて来て」

と解するが、河内山清彦が『源氏物語』の全用例から「後

について行くの意味」とせねばならぬことを指摘して以来、

木船『解釈』・木村ほか『全歌』などがこれに従う。なお、

清水『新書』は「従^ついてきて離れない」と解釈しながらも、

宮廷への憧れに言及する。中野78も同様。しかし、『源氏

物語』ほか物語・和歌の用例を検討した大石直子89による

かぎり、現代語にも通じる、思慕、憧れをもって思いを寄

せる意味に解する方が妥当である。

○いまこのへぞ思ひみだる

こうして九重にいる今も、思いは、このえに乱れ乱れている。実践女子大学本・瑞光寺本・陽明文庫本など「このへぞ」。西本願寺本・河野記念館本・群書類従本など定家本末流の本には「こゝのへに」とある。「ここのへぞ」を九重（宮中）と「いくえにも」の意を懸けるとするのは、竹内『評釈』・山本『集成』・伊藤『大系』・中『和歌大系』・中野『日記』などの諸注。木船『解釈』は「九重」だけでは「幾重にも」の意味にならないし、「幾重にも」の意で「九重ぞ」という例もなく、連用修飾の場合は「…にぞ」の形をとる必要があるとして「ここのへに」と本文を改訂するのをよしとした。木村ほか『全歌』のみ賛同するが、他に従う注釈はない。

補説

「身のうさ」とは何か？

「身と心」の問題と並んで「憂し」も『紫式部日記』『紫式部集』の重要なキーワードであった。形容詞「うし」は『集』中七例（実践女子大学本Ⅱ 53・60・61・67・70・121・123、陽明文庫本Ⅱ 54・57・61・62・114・日記歌 117・118）、名詞「うさ」は三例（実践女子大学本Ⅱ 56・105・123、陽明文庫本Ⅱ 91・100・113）。すべて歌中に用いられている点に注目したい。

……こせうしやうのすみのかうしをうちた、き

たれば、なちてをしおろしたまへり。もろともにおりゐて、ながめぬたり

68 かげ見てもうきわがなみだおちそひて
かごとがましきたきのをとかな

返し

69 ひとりゐてなみだぐみける水のおもに

うきそはるらんかげやいづれぞ

あかうなればいりぬ。長きねをつゝみて

70 なべて世のうきになかるゝあやめぐさ

けふまでかゝるねはいかゝみる

かへし

71 なにごとゝあやめはわかでけふもなを

たもとにあまるねこそたえせね

はつゆきふりたる夕ぐれに、人の

122 こひわびてありふるほどのはつつきは

きえぬことそうたがはれける

返し

123 ふればかくうさのみまさる世をしらで

あれたるにはにつもるはつゆき

なお、詞書中には「うし」「ものうし」はない。「身のうさ」は当該 56（91）番歌と 106（100）番歌、さらに 67 番歌（陽明文庫本では日記歌中の 117 番歌）「憂きわが身かな」と見

出すことができる。ほぼ熟した表現となりつつあるかに見える。

ちなみに『紫式部日記』には、「身の憂さ」一例（岩波文庫四五頁）、「うし」が四例。ただし四例中、「世を憂し」「憂き世」（七頁）「世の中……憂きものに侍りけり」（八〇頁）と「世」との組み合わせが主体となっている。「ものうし」は三例。数字の上からはむしろ『日記』よりも『集』の方が密度が高い用語といえるかも知れないが、作品の評価としては『日記』の自照性は古くから論じられることが少なくない。

しかし、横井「紫式部日記の「効用」——白詩への架橋をとおして」（仁平道明編『源氏物語と白氏文集』新典社、二〇一二年五月刊）横井『源氏物語の風景』武蔵野書院、二〇一三年五月刊、第四篇第七章として所収）は、以下のような、いわゆる沈淪歌人たちの類例をあげる。

「世中の心になはぬ」など申ければ、「ゆくさきたのもしき身にて、かゝることあるまじ」と人の申侍れば 大江千里

① 流ての世をもたのまず水の上の泡に消えぬるうき身と思へば（『後撰集』雑二・一一一五）

思ふ所ありて、前太政大臣に寄せて侍ける

在原業平朝臣

② たのまれぬうき世中を歎つゝ、日陰に生ふる身を如何せん（『後撰集』雑二・一一二五）

世中の心になはぬ事申けるついでに

つらゆき

③ 惜しからでかなしき物は身なりけりうき世そむかん方を知らねば（『後撰集』同・一一八九）

身のうれへ侍ける時、摂津の国にまかりて住み始め侍けるに 業平朝臣

④ 難波津を今日こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟（『後撰集』雑三・一二四四）

詠懷

⑤ しら波のたちかへりくる数よりもわが身をなげくこ

とはまされり（書陵部本『大江千里集』一二〇）

さらに、これらを承けて、「文字に書かれるそこには、端的には特定読者に向けた意図があり、「他目的」あるいは「効用」ぬきで書かれる「作品」など存在しない時代」（『源氏物語の風景』五六七頁）であると指摘する。紫式部の「うし」の心情も、文字に表現されている以上、自己の内部に向けた「自照」のではなく、「特定読者」に「うき」状況の自らを訴陳したものと解すべきである。

この場合の「特定読者」とは、宮仕え開始の間もないころ——「はじめてうちわたりをみるにも」——とすれば、

相手は中宮彰子か、実質上の傭主の藤原道長の他は考えられない。真意は、ご愛顧を切に切にお願い、といったところすら込められているはずである。

注

- (1) 木船重昭『紫式部集』解釈研究(一)～(四)『中京大学文学部紀要』(一五巻一号～一六巻一号、一九八〇年七月～一九八一年七月)。ほかに「紫式部集錯簡攷」(同誌一五巻三号、一九八一年一月)など(木船『解釈』)に所収。

- (2) 以下、言及するもののみ挙げれば、関根慶子・阿部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子『赤染衛門集全釈』(第1巻、一九八六年九月刊)、森本元子『定頼集全釈』(一九八九年三月刊)、森本元子『殷富門院大輔集全釈』(一九九三年一〇月刊)、平野由紀子『小野篁集全釈』(一九八八年三月刊)、筑紫平安文学会『為頼集全釈』(一九九四年五月刊)。

- (3) 以下、言及するもののみ挙げれば、竹鼻績『小大君集注釈』(一九八九年六月刊)、中川博夫『大式高遠集注釈』(二〇一〇年五月刊)。

- (4) 清水好子『紫式部』(岩波新書、岩波書店、一九七三年四月刊)。評伝に位置すべきもので、いわゆる注釈書で

はないが、従来それに準ずる扱いを受けているので、ここにも引いておくこととする。

- (5) この件については、故池田猛雄氏ほか笠間書院関係者、同志社大学関係者から事情をうかがったことがあるが、本題ではないので、ここでは深く詮索しない。

- (6) 以下、言及するもののみ挙げれば、『平中全譜』(私家版、一九五九年九月刊、のち同朋舎、復刻一九七八年一月刊)、『土佐日記全注釈』(角川書店、一九六七年八月刊)、『紫式部日記全注釈』全二巻(角川書店、一九七一年一月～一九七三年三月刊)、『枕草子解環』全五巻(同朋舎、一九八一年一〇月～一九八三年一〇月刊)。

- (7) 小松英雄『日本語を動的にとらえる——ことばは使い手が進化させる——』(笠間書院、二〇一四年一月刊)、二二三頁。この後の二字下げ引用は二二九頁による。

(よこい たかし・実践女子大学教授)